

青春の源流

② 激流篇

森村
誠
—



青春の源流

② 流篇
激

森村誠一

講談社

青春の源流 ② 激流篇

昭和五十八年十二月二十五日 初版発行

著者 森村誠一

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二二 郵便番号 一一二

電話東京 (〇三) 九四五―一一一 (大代表)

振替東京 八―三九三〇

初出誌

「週刊現代」(昭和55年8月7日号) 56年2月19日号

印刷所 株式会社廣済堂

製本所 株式会社黒岩大光堂

定価 一〇〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り下さい。

送料小社負担にてお取り替えます。

©SEIICHI MORIMURA 1983 Printed in Japan



ISBN4-06-200882-3(0) (文二)

青春の源流

② 激流篇

目次

熱い夢	139
南の黒雲	123
酸鼻なる和解	105
地獄の土竜 もぐら	67
自己からの解放	57
祖国でも大義のためでもなく	36
第一義の推移	24
「トロイの牛」	7

骨の光

152

骨化した愛

171

許可された宿峰

182

埋み火

190

泥沼への道程

206

特命暗殺部隊

232

北の狼煙のろし

241

恐怖の搬送

257

装 装
画 幀
野 井
中 上
昇 正
篤

青春の源流

② 激流篇

「トロイの牛」

1

一九四六年（昭和二十一年）十二月十九日、フランス総督ダルジャンリュウの、降伏し奴隷になるか、しからずんば死あるのみという最後通牒によって、八年間にわたる第一次インドシナ戦争の幕は切つて落とされた。

飛行機、戦車を始めとする近代兵器を擁するフランス正規軍に対するは、小銃千五百挺の武器しかないベトミンのゲリラである。ベトナムにとって苦しい戦いが始まった。

フランス軍がハノイを始め、全ベトナムの要地を手中におさめるのは、易々たることであった。ベトミン軍は止むを得ず、北部山岳地帯にたてこもった。ここは抗日運動の拠点となった地である。

楯岡小隊のメンバーは、ドン・ラップ村におけるフランス軍の虐殺を目撃し、その手先をつとめた元上官野中大尉への復讐を誓い、ベトナムに留まつて、ベトナムの自由と独立のために戦うことを決意した。

一九四六年は暮れ、四七年になった。ベトナムの正月は、新暦の一月末か二月初めである。国内の北部では桃の花が咲き、南部では杏あんずが薫かおる。平和時ならば、ハノイやサイゴンの繁華街に花売りが立つ。大晦日には爆竹が街々に鳴り、新年を寿ことほぐ人々の騒さわめきが夜を徹してつづく。

だが今年のテトは爆竹の代りに砲撃がベトナムの山野を震わし、街路には花売りの代りに完全武装のフランス兵が立った。

ベトナム人民は、抵抗戦線の中にテトを迎えた。その戦時下のテトに楢岡とペンヨンは結婚した。結婚に立ち会ったのは、楢岡小隊のメンバー、ヴォ・ハイ・タン、および居合わせたベトミンの中隊の兵士である。

ペンヨンは花嫁衣裳の白アオザイの代りに迷彩を施した野戦服を着けている。立会人も野戦服姿に銃をもっている。結婚式の華やいど雰囲気的一片もない戦場の結婚であったが、ペンヨンの美しきには、まぎれもなく新妻の輝きがあり、立会人の祝福は、本物であった。

楢岡は、ペンヨンと結婚することによって、ベトナムと同化し、ベトナムを第二の祖国としたのである。

「これからの戦いが、これまでの十倍も苦しいものになろうとも、タテオカとペンヨンは二人の心と力を合わせてその百倍の苦しみにも耐えられるだろう。私たちは勝つことを知っている。たとえ私たちが死ぬと告げられても、私たちは甘んじてそれをうけ入れるだろう。同志よ、聞こえるか、鎖に縛られた祖国の押しつぶされた叫び声が。その叫び声が聞こえるかぎり、私たちは戦いを止めない。いまここに生まれた新しいカップルの上に一日も早く勝利の日が訪れるように」

ヴォ・ハイ・タンがいかにも抵抗戦線のリーダーらしいスピーチをした。

2

ベトミン軍にとって苛酷な戦況はつづいた。二人は蜜月の甘い語らいをもつ間もなく、銃を取って戦った。夫婦で戦っている者は、彼らだけではなかった。ベトナムの戦いの特徴は、戦争が生活その

ものであるということである。

紀元前一一一年漢民族の侵略をうけて以来、ベトナムの歴史は抵抗の歴史であり、ベトナム民族の生活は、二千年にわたって戦争と共にあったといっても過言ではない。

戦争が生活であるから、兵士も家族を連れて戦う。ベトミン軍兵士は、兵器の他に食糧、食器、家財道具などを背負う。軍団と共に、家族がそろそろ従って来る。いや家族も軍団の一部なのである。

兵士は小銃や無反動砲や迫撃砲の砲架などと共に、米や塩や鍋釜を背負い、子供の手を引いている。家畜がその後から従って来る。子供たちは、不発弾が混っているかもしれない迫撃砲の薬莖で九柱戯をしている。親もそれを平気な顔をして見ている。およそ世界に家族連れで実戦をする軍隊は、ベトナム以外に類を見ないだろう。

戦争が生活として民族の中に定着しているのである。この家族連れの軍隊にフランス軍のB 26、ベアキャット、ナパーム弾、一五五ミリ砲、ロケット砲などが襲いかかった。対するベトミン軍の主武器は火縄銃に等しいライフルである。

だがベトミン軍には大きな味方が付いていた。それは彼らのたてこもったベトナムの自然である。中越国境に連なる石灰岩質の山岳は、起伏が激しく、谷は切り立ち、その間を毛細血管のように急流が奔っている。荒涼たる斜面はジャングルに蔽われ、野生動物以外の通行を阻んでいる。

それはベトナムの歴史を象徴するような混沌たる地勢であった。この地勢がベトミン軍を護る天然の要害となったのである。鋸齒状の峰や葉脈のような水流や海のようなジャングルにおいては戦車は立往生し、大砲は標的を失い、飛行機は悪気流に悩まされた。進軍するに頼れるのは人間の足だけであったが、機動性に甘やかされたフランス軍は、ジャングルのつる草にからみつかれ、密林の毒虫によってベトミン軍に叩かれる前に満身創痍(そうい)となっていた。

雨期には河川が氾濫して、フランス軍を泥沼地獄の中に陥れた。ベトナム全土の要所をフランス軍に明け渡したベトミン軍は、北部山岳地帯に拠って最後の抵抗戦線を張っていた。この地はベトミンが結成された所であり、革命揺籃ゆらんの地である。

ベトミン軍は追いつめられたが、追いつめられた分だけ抵抗は激しくなった。業ごうを煮やしたフランス軍は、一九四七年（昭和二十二年）十月十日から山岳地帯に徹底的な掃討作戦を繰り広げた。これがいわゆる「越北ベトナムの戦い」である。

総司令官ルクレール將軍は、

「我々は十週間以内に反乱軍を根絶やしにするだろう」と豪語した。空にB52爆撃機の大編隊、陸に重戦車、重砲、装甲車の機甲部隊、河川は重火器を満載した上陸用舟艇しゅうていで埋めたててひた押しに進む大機械化兵団の前に「火縄銃」と竹製のヘルメットで武装した栄養失調のベトミン軍は、卵のように叩き潰されるのをだれも信じて疑わなかった。そしてまさにベトナム民主共和国は累卵るいらんの危うきにあったのである。

ルクレール將軍の大掃討作戦の前に、楯岡は、覚悟を決めた。この一年は、山岳に拠よつてのゲリラ戦でフランス軍を悩ませたが、今度は生き残れないような気がした。いかに天然の地形が味方しているとはいえ、敵の大機械化兵団の前のベトミン軍は、戦車の前のカマキリである。カマキリの唯一のカマすら打ちつづく戦いにボロボロに刃こぼれしている。

「きみとは短い縁だったが、きみとめぐり逢えたことを神に感謝している。日本では親子は一世、夫婦は二世という言い伝えがあるけど、今度生まれ変わってきたら戦争のない時代と国で出会いたいな」

楯岡はしみじみと妻に言った。夫婦ではあっても二人だけで話し合える機会は少ない。「私も。砲撃の音ではなく、小鳥の鳴き声で目を覚ましたい。銃の代りにあなたの赤ちゃんを抱きた

いわ」ペンヨンの表情が束の間遠方を見た。

「きみは、戦争が終ったら、いや、いま平和だったらなにをいちばんしたい？」

「私ね、アオザイを着て、街に買い物に行きたいわ。いろいろなお店を覗いて、きれいな服やアクセサリーや靴を買うの。そして買い物が終わった後、街の喫茶店のテラスでアイスコーヒーを喫むのよ。あなたとあなたの赤ちゃんといっしょに。花がいっぱいの街角の喫茶店で。ああ、そんな日が早くこないかなあ」

このときだけは、ベトナム軍の女闘士も、ごく普通の女に還っていた。平和な世の中ではごくなんでもない日常生活の一コマが、目の眩むような幸せの光に包まれて見える。その幸せの日は、いつの日か必ずくるであろう。

だが自分たちが生きている間に果たしてその幸せを見られるだろうか。祖国の自由と独立のために戦い、勝利の日を確信しておりながら私の幸せは生ある中に果たし得ないことを予感している。そんな妻をいじらしくおもった。

「あなたはなにをなさりたい？」

ペンヨンの目が覗き込んだ。

「ぼくか」

一瞬、彼女の面に北アルプスの連峰が重なった。

「平和だったら、野球をやりたいな」

「野球って、何？」

「あ、そうか。きみは野球を知らなかったんだな」

戦乱のベトナムにはまだ野球は入ってきていなかった。ベトナム人に現在人気のあるサッカーや卓

球の普及も、ベトナム戦争終結後の一九七〇年代に入るのを待たなければならない。

野球のルールを簡単に説明してやると、ペンヨンは目を輝かせて、

「戦争が終つたら、各小隊毎にチームをつくって試合ができるわね」と言った。楯岡は、束の間、ベトミンの兵士による野球大会を想った。

3

フランス軍の総攻撃は始まった。総兵力一万五千にあらゆる近代兵器を投入してベトミン軍を一もみにもみ潰すべく押し寄せて来た。彼^{ひが}我の兵力の差は歴然としていた。大なる火力を擁した側が勝つ。それが近代戦の常識である。フランス軍は勝利を疑わなかった。

だがフランス軍には大きな誤算があった。

フランス軍兵士はだれ一人としてこの戦いの意義をよく知らないのに対して、ベトミン軍は、一兵士から非戦闘員の家族まで祖国独立のための捨て石として、死ぬことをまったく恐れていなかった。

おっかなびっくり及び腰の侵略軍と、死を恐れぬ国土防衛軍の戦いにおいて、勝敗の行方を定めるものは、近代兵器の火力や近代戦の常識ではなかった。

ベトミン軍の勇猛果敢な働きを、全ベトナム国民が結集して支えた。いまやフランス軍はベトナムの兵士だけではなく、全国民を敵に回したのである。草を刈っている農夫がいきなり手榴弾を投げつけたり、腰の曲がっている老翁^{ろうやう}が地雷を仕掛けたりした。

昼は圧倒的にフランス軍の天下であった。だがいったん闇が地上に屯すると、ベトミンのゲリラがもののけのように跳梁^{ちやうりやう}した。ゲリラは夜陰に乗じてナイフをひらめかし、狩猟用の弓を音もなく射かけて襲いかかって来る。

近代兵器で武装したフランス兵がのどをかき切られ、胸に矢を射立てられて、声をあげる間もなく死んだ。朝がくるとフランス兵の死体が転がり、武器弾薬食糧が奪われていた。

フランス兵は怯えた。大義名分のない戦いにおいて、近代兵器がいかに無力であるかをフランス兵はおもひ知らされていた。かつてのフランス革命の勇者たちも、いまは信念を失って、自分だけは死にたくないという保身本能のみから近代兵器を操っているのである。

ルクレール將軍は焦った。彼が豪語した十週間でベトミン軍を殲滅するどころか、出撃する度に奇襲をうけて兵力を消耗した。

「我が軍が相手にしている敵は、現代の軍隊ではない。弓と槍で武装した中世紀の遺物のようなゲリラにすぎない。初めから勝負にならない戦いを進めておりながら、むしろ我が軍が押されている。もしこの戦いに敗れるようなことがあれば、フランス軍は世界で最も弱い軍隊の汚名を冠せられるだろう。我々が敗れるということは、世界先進国軍隊の名にかけて許されないのだ。断じて十週間以内にベトミンを撃滅せよ」と督励した。

4

楯岡小隊の各メンバーは、ベトミン軍の中隊もしくは小隊を任されて奇襲攻撃の指揮を取った。奇襲は旧日本軍の得意な戦法である。

ベトミン軍には将校と兵との区別は明らかに分けられていない。もともと将校という階級はなく、それぞれの戦歴や実績によって連隊、大隊、中隊、小隊、分隊の指揮官の役目をあたえられている。楯岡はヴォ・ハイ・タン率いる大隊の中の一中隊の指揮を取り、福武元軍曹と古沢元上等兵が同じく中隊、以下のメンバーは、この三人の指揮下にある小隊の長となっていた。

フランス軍は白兵戦になると、極端に弱かった。近代兵器が用をなさない、銃剣と銃剣、肉弾と肉弾の戦いになると、戦わずして逃げ出すか、降伏するかした。

フランス軍が昼間進んだ分を、ベトミン軍が夜襲によって奪い返した。そのベトミン軍の先頭に常に楯岡小隊のメンバーが立っていた。楯岡小隊の勇猛ぶりは、ゲリラの名手揃いのベトミン軍の中でも鳴り響いた。フランス軍にも彼らの戦いぶりは聞こえて、ベトミンの中に「幻の日本軍」が味方しているといつて恐れた。

フランス軍は度重なる夜襲によって募る損害を防ぐべく、警戒を嚴重にした。歩哨の数を増やし、陣営の周囲にサーチライトを照らして少しでも怪しい影を認めると、一斉射撃を加えた。このためさすがのベトミンゲリラもフランス軍陣地に近づけなくなった。

ベトミン軍の武器弾薬はほとんどフランス軍から奪ったもので賄っていた。中国からの援助物資はまだ届いていない時期である。

フランス軍はベトミン軍の糧道を断つためにゲリラを支援する農村を破壊する戦術に出た。ベトナム農業を支えるためには、水牛が絶対不可欠である。フランス軍は、「十人のベトミンを殺すより一頭の水牛を殺したほうが大きなダメージをあたえられる」と言い放って、水牛を目の敵に殺した。水牛を殺された農家は、農業を捨てざるを得なくなった。その限りにおいてはフランス軍の戦術は効を奏したのである。

農業は疲弊し、夜襲が困難となって、ベトミン軍は次第に迫いつめられてきた。

フランス軍は優勢に乗じてランソン近くの密林を切り開いて一大前進基地を建設していた。ここに一個旅団の兵、軍需物資、武器弾薬などが集結されていた。頽勢を挽回し、フランス軍に打撃をあたえるためにはこの拠点を叩く必要があった。ヴォ・ハイ・タンは各中隊長を集めて策を募った。